列・蒐錄され、適宜の補正を加へ世に問はれたものである。

その内、首章の「魏晉佛教の展開」は、數世紀の間に各種の發達の徑路を辿り、各種の民族・文明の中を通過して支那に輸入された複數の佛教が支那民族の研究と實踐により支那文化の内へ攝受されてゆく過程の初期を取り扱つたもので、後漢の神仙方術的佛教、東晉の格義・清談佛教等の節目を見ても、いかに著者の佛教史において一般歴史事象、特に支那的思惟との關聯が重視されてゐるかが窺れる。これと姉妹篇をなす最後の章「支那淨土教の展開」においては、かかる文化史的觀點の上に立つて、淨土教教理や信仰の發展を一貫した論旨の下に進め、著者の佛教學者としての搖ぎなき地位を知り得る。右二篇は全卷の概論といふべく、叙述の範圍は六朝全體に及んでゐるが、その中間の八篇は北魏佛教史上の特殊問題につき、博搜せる史料の精確なる考據の上に立つて縱横の論說の筆を揮はれたものである。

「北魏建國時代の佛教政策と河北の佛教」は佛圖澄・道安らによる河北の佛教、後秦の都長安の羅什系の佛教、北涼曇無讖系の佛教が、前後して太祖・太宗時代の大同に流入し、北族華化の役割を果した次第を述べられたもの、次の「北魏太武帝の廢佛棄釋」は、有名なこの事件を佛道二教の爭ひといふだけでなく、鮮卑朝廷における漢族官僚の進出過程に眺めんとする意圖の下に、中心人物崔浩の家系を通じて寇謙之の天師道との脈絡を尋ねたもの、「沙門統曇曜とその時代」は廢佛の擧が颱風一過した後、獻文帝・文明太后・孝文帝の時代曇曜の雲崗石窟の開鑿等復興せる佛教の姿を叙述したもの、次の「北魏の僧祇戸・佛圖戸」は曇曜の行つた一事業としての寺院の管理する農奴及びその勞働生産物を社會事業や寺院經營に利用した制度を詳述したもの、「雲崗三則」は常盤・關根兩博士の支那文化史蹟第一輯山西の佛教遺蹟に關する圖版に附せられた解說中の誤謬を愼重な態度により指摘し批正されたものである。次の「北魏の佛教匪」は支那匪族の政治性と宗教性を問題に取りあげ、肅宗時代の暗殺教團「大乘賊」を始め沙門が指揮した諸妖亂を列擧、その顚末を論ぜられたものである。「支那の在家佛教特に庶民佛教の一經典」は太武帝廢佛の結果佛教が民間に潛入し支那固有信仰と習合し道教的佛教を形成してきたと前篇において豫察的に言及されたことを、僞經「提謂波利經」の弘通をあとづけることにより確證された特に精彩ある名作である。

「龍門石窟に現れたる北魏佛教」は二百五十頁に亙る長篇で、龍門石窟の造像記を史料とし洛陽時代の北魏貴族の信仰生活を明かにし、信仰對象に變遷を通じて飜譯的佛教が支那人の爲の佛教にまで展開したと論ぜられてゐる。簡單な紹介でつくされぬ本書の價値は熟讀してのみ味得されよう。(昭和十七年十月・弘文堂書房發行・菊判本文六五四頁・索引二八頁・圖版二九・附圖四・定價拾圓)(宮川尙志)

ギリシア史研究　第二

原　隨　園著

さきに「ギリシア史研究　第一」の改版をはじめ、「世界史への斷想」、「ギリシア彫刻史」と相次いで公刊をみた原先生の著作に、

今またこゝに「ギリシア史研究 第二」を加へ得たことは、學界にとつての大いな寄與であるのみでなく、平素親しく指導をうけてゐる我々にとつては、一層喜びにたへないものがある。永年に亙る先生の該博精緻なる研究の成果が、轉變激しきこの戰時下に廣く一般に公表されることは、學術の領域に於いても稍もすればヒステリ的なものが横行しつゝあるのを思ひ併す時、一しほ重要な意義のあるを痛感せざるを得ない。決戰下であるだけに堅實な學問の樹立が肝要の急務であり、そのためにもかゝる健全な述作は必須である。日本に於ける西洋史學をして獨自の道を歩ましめ、それによつて銃後建設の實現を素志とせられる先生の企圖は、確かに本書に於いても充分に果されてゐるといへよう。

本書に收載せられてゐる七篇の論文は、いづれも皆、昭和五年以來先生が發表せられた論考の中より政治史、社會史的なものより選輯されたものである。最初に發表せられた當時の狀勢や又その目的の相異のために、一見本書の諸論說の間には統一がないかにみえるかもしれない。例へば第一の「ギリシア史に於ける傭兵の問題」では傭兵の必然性と可能性が、廣くギリシア史一般と關聯せしめられつゝ巧みに且つ興味深く論述せられており、第三の「アテナイの民主政治と農民」に於いては、農民が如何にアテイナ民主政治の歷史に於いて重要な役割を占めてゐるかが、諸方面から考察されてゐる。第二の「クロンの叛亂とその年代」もその中心はベロッホ說の批判にある考證的な論文ではあるが、やはりギリシア史に於ける農民の重要性が鋭く指摘されてゐる。この三論文が廣義の社會經濟史的なものとすれば第六の「オリュントスの陷落」に於いては、このギリシア東北部の一地域のマケドニアによる征服が、ギリシア都市國家の滅亡に如何に決定的な意味をもつかが明白に示されてゐる。その意味で本論文も社會經濟史的なものではあるが、他面こゝにギリシア史に對して投げるペルシアの力の重要性が强調されてをり、東西交涉の深き歷史的聯關を思はせてゐる。かゝる面を明確に現はしてゐる事件がペルシア戰爭であり、第五の論述はこの側面よりするこの戰爭の性格の詳細にして卓越せる解明である。ペルシアのもつ歷史的使命の重大性は又最後の「印度文化とギリシア及び西南アジア文化の交流」に於いても指證されてゐると共に、ヘレニスム文化が如何に東漸したかが文化の諸面より考察されてゐる。我國に類似の論文がすくなく、而も今日新らしく東西交涉が問題とされてゐる時、極めて重要な論說といへよう。最後に第四の「アテナイの民衆指導者」では現代の獨裁者とその政治に對し、ギリシアに於けるそれの性格が論ぜられ、現狀と併せ考へて多くの示唆をもつものである。

以上の如く本書を構成する諸論文はその主題や考察の方法に於いて外見的には夫々相異して統一を缺くかの如くである。然し各論文を少しく精讀する時、讀者はこの相異にも拘らず、却つてそこに生氣ある統一性が存在するのに氣付くであらう。それは先生の永きにわたる興當にして深遠な研究によつて培はれた或る根源的なものである。すべての成果がそこから出で且つそれに連なる「根源的」なものである。このものについてはこゝで說く紙幅はな

く又評者にその資格もないが、本書の各論を通して各人がそれを把握し、それを基礎として更に我國に獨自な西洋史學を建設することが、我々後學の課題であると確信する。―

聞く所によれば、先生の最も得意とせられる神話、傳説に關する諸論考が、近く「ギリシア史研究 第三」として上梓される豫定であると。先生の研究の成果がかく續々と刊行されることは、我々門下生のみならず、我國學界にとつても裨益する所大なると思ひ誠に慶賀にたへない次第である。(創元社發行・昭和十八年一月・A5列・四圓五拾錢)(前川貞次郎)

猶太建國運動史

菅原憲著

パレスチナに於ける猶太人の建國問題は、事柄の重要性にも拘らず、問題が地味なためか從來我が國では餘り注意が拂はれて居らなかつた。しかるに小アジアを取得する事なき樞軸側の勝利なぞ考へ得られざる今日、その事からしてもこの問題は絶對的なる關心を我々に對して要請してゐるのである。かゝる際この建國問題に對するよき解説書こそ何より必要とされるのであるが、さきに「獨逸に於ける猶太人問題の研究」なる好著を世に送られた著者のこの書の出現は、その希望を滿して餘りあるものと云はねばならぬ。

全十四章よりなる本書の重點は、「前世紀の末葉以後」の建國運動に置かれ、猶太建國運動に對する「諸國の猶太人の動向、パレスチナに於ける新舊猶太人の態度、亜拉比亜人對猶太人抗爭、並にそれに關する英國政府の對策」の叙述がその內容をなしてゐる。

先づ問題の概觀が最初の三章で爲される。建國問題はこのディアスポーラの民の念頭を片時も去るものではなかつた。しかし近代迄はその運動はむしろ空想的であり理論的であるにとゞまつた。十九世紀末ヘルツルが登場するに及んでそれはユートピアとしての問題より完全に現實の問題となり、「思考の時代より實行の時代へ」と移行するのであるが、この間の著者の筆もとみに活氣を帶びる。しかしこの希望も猶太人の內紛世界狀勢の變化などによつて空しく消え、ヘルツルは失意の內に逝くのであるが、やがて第一次世界大戰勃發するや英國窮餘のバルフォア宣言となつて各國チオニステンの血を沸かしめ、殆んど彼等の素志は實現するかに思はれた。しかしシリアを自國の帝室主義の支配下にあくまでもおかんとする英國は苦悶と詐略に滿ちた對猶太人亜拉比亜人對策をくりかへし、結局建國は全く實現せず、問題は未解決のまゝ一時的な安定を保つに至り、こゝで著者の叙述はとめられる。

豐富な內容に對しかゝる概略は何等意味なきものたるのみならずその價値をも傷けるに過ぎぬ。平明な美しい文章は問題の主要點をあます事なく讀者に傳へるであらう。たゞあくまで感情をころした著者の叙述は時には簡明にすぎてヨーロッパ史の知識が乏しいと問題の充分浮き出て來ない部分があるのが遺憾と云へば遺憾であるが、それはこの小册子の限られた紙數では到底望む可からざる事であつて、啓蒙書としては完璧に近いと稱して決して過言でないと信ずる。たゞつひでにもう一言述べさしていたゞきた